

# モノクロ写真のような味のある人生!!



石岡モノクロ写真研究会  
クラシックカメラを楽しむ会

## 眞家義之さん

「みの〜れでの写真展は  
生きがいのひとつです」  
と穏やかに話す眞家さん。

みの〜れと共に生活するスタイル

Minole Life  
のすすめ

No.83

萌木色の若葉がまぶしい季節になりました。水田には水が入り、まるで大きな鏡のようになって真つ青な空を映しています。その水田にも早稲が植えられました。初夏は足を止めて写真を撮る機会が増えたような気がします。今回はクラシックカメラを楽しむ会、石岡モノクロ写真研究会などで写真活動に取り組み、みの〜れでは毎年、ときめき美の小径の企画展に写真を出展している石岡市にお住いの眞家義之さん取材します。

## 来場者に満足して もらえる写真を!!

眞家さんは石岡市に生まれ育ち、小学生の頃から写真に興味を持つようになり、きつかけは本の付録に手作りのカメラセット(紙で出来たもの)が付いていて、それを組み立てたのが始まりです。現像などの液体粉を水で溶くものも付いていてその粉がなくなるとおもちゃ屋さんで購入することが出来たそうです。「その頃は現像自体も良くなかったけど絵がふくつと浮かびあがってくるのが楽しかった」と当時を懐かしそうに話してくれました。

本格的に写真を撮り始めたのは30代、八郷に写真クラブがあったので『全日本写真連盟八郷支部』に入って写真を教えてもらったそうです。「本当の趣味です。本当に好きなんだね。毎日毎日写真のことしか頭がないんですよ。勤め始めたころはモノクロをやっていましたけど、だんだん仕事が忙しくなるとカラーしかやらない時期が5〜6年

ありました。また時間に余裕が出てくるようになってモノクロをやるようになりました。カラーは写真だけ撮って写真屋さんを持って行きましたが、モノクロは自分で現像も出来るところがいいところですね」と興味深いお話しをしてくれました。

また、「写真を撮り始めた頃は、モデル撮影からお祭りまで何でも撮っていました。今では人はあまり入れないで街の中を撮りますね。アートのな物とか、しぐさとか、昔ながらの時代を感じさせる様な、なごり、とか、人の気配を感じさせる様な写真を撮りますね。東京に撮影に行くようになって10年になります。最初は下町の方をねらって行っていましたが、今は銀座でもどこへでも行きます。写真は季節によっても違いますが、午前午後でも違ふんですよ。光と影を利用して撮れば、遠近感が出て強さも出てきますよ。自宅に暗室があるので撮影に出ないときは暗室に入っていますね。庭の手入れの休憩室にもなっているのここに入っていると、いろいろと思いつかふところがあるのです。現像時間

を計る砂時計を作って、それを友達にも作ってプレゼントしたり、じつとしていられないんです。動いていないと駄目なんです」と活字活字と話す眞家さんが印象的でした。

「モノクロ研究会を友人と2人で立ち上げて5〜6人で活動していましたが、現在は3人です。茨城県芸術祭美術展覧会(県展)に出展しているおかげで茨城の中でもたくさん友達が出来ました。体育会系だから(野球少年でした。作品で勝負したいという気持ちがある)もあります。写真を見てほしいと相談されたときもスバルで教えますね」と笑顔で話してくれました。眞家さんにとってみの〜れは「ここで写真展をやることによって生きがいを感じています。ちゃんとした照明があるところやりたかったのです。ここで楽しませてもらうとずいっとやっていきたいな」と思っています。5月22日から27日までクラシックカメラを楽しむ会の写真展をみの〜れ風のホールで実施しますので、ぜひ観に来てください」とメッセージも頂きました。

(藤田佐知子)